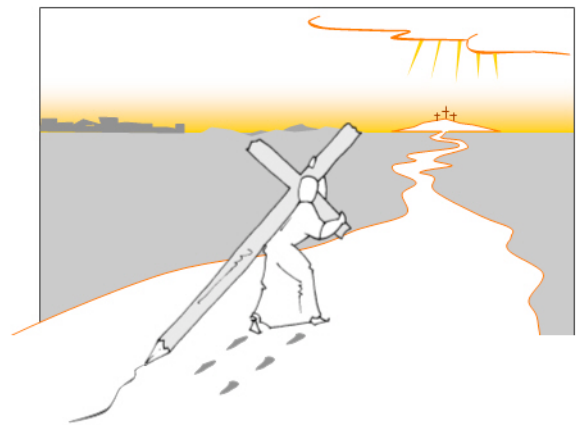


教会暦と聖書の流れ

先週のペトロの信仰告白に続く、いわゆる「受難予告」の場面です。先週の箇所で、信仰告白をしたペトロはイエスから祝福され、特別な使命を与えられていましたから、今日の箇所で同じペトロがすぐに厳しく叱責されてしまうのは不自然に感じられるかもしれません。これはマルコ福音書8章の「ペトロの信仰告白、メシアであることの口止め、受難予告」という流れの途中に、マタイがペトロへの祝福と特別な使命授与という別の伝承(16章17-19節)を挿入したためだと考えられます。

福音のヒント

(1) 「受難予告」ということを特別な未来予知能力によるものとする必要はありません。イエスの活動は貧しい人や病人に大きな希望と励ましを与えましたが、逆にファリサイ派の人や律法学者には歓迎されませんでした。律法を基準にして人間をランク付けする考えに対して、イエスはすべての人を例外なく神の子であると見て大切にしました。そのことは、律法の基準の上で社会的にも宗教的にも優位を保っていた人々(エリートや指導者たち)には自分たちの地位を脅かすものと感じられたのです。その人々からの反感と敵意が迫ってきているのをイエスは感じておられたはずですが、さらに旧約時代の預言者たちの苦難や洗礼者ヨハネの殉教を考えれば、イエスがこのまま活動を続ければ迫害と死は避けられないと感じたとしても不思議ではありません。



それでも、イエスは自分の身を守るために、これまでの歩みを変えるということはありませんでした。最後まで、すべての人の父である神への信頼と神の子であるすべての人への愛を貫くのです。「たとえ受難と死が待ち受けていたとしても、この道に行く」、十字架に向かうイエスの決断とはこういうものだったと言えるでしょう。

それでも、イエスは自分の身を守るために、これまでの歩みを変えるということはありませんでした。最後まで、すべての人の父である神への信頼と神の子であるすべての人への愛を貫くのです。「たとえ受難と死が待ち受けていたとしても、この道に行く」、十字架に向かうイエスの決断とはこういうものだったと言えるでしょう。

(2) 「受難予告」の中には、復活の予告も含まれています。「復活」という考えは旧約聖書の中で、ダニエル書12章やマカバイ記 二 7章(第二正典)に特に明白に現れています。どちらも背景には、紀元前2世紀、セレウコス朝シリア(ヘレニズム王朝)の王アンティオコス4世エピファネスのユダヤ人に対する宗教迫害があります。神に忠実であろうとすればするほどこの世で苦しみを受ける、という現実の中で、神が死を越えて従う者に救いを与えてくださる、と確信するのが復活の信仰です。イエスもまた、あの時代のユダヤ人としてこのような確信を抱いていたのは、当然のことだとも言えるでしょう。

「必ず…ことになっている」はギリシア語の「デイdei」という非人称動詞の訳です。これは必然的に起こることを表すだけでなく、それが神の定めたこと(神の計画)だという

ことを表す言葉です。イエスはこの受難・死・復活に神の計画を見ていたはずで

(3) 弟子たちはイエスの受難予告を理解できませんでした。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」というペトロの言葉は、イエスの身を案じての言葉だったのでしょう。あるいは弟子たちは、当時のほかの人々同様、地上で栄光に輝き、勝利を収めるメシア像しか受け入れられなかったのだと思います。イエスはペトロに向かって「サタン、引き下がれ」と言います。これは荒れ野の誘惑の場面で語られた「退け、サタン」(マタイ4章10節)を思わせるような厳しい言い方です。サタンとは人を神から引き離す力のシンボルです。「あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」！ 今もわたしたちを神から引き離そうとする力が働いていると感じることがあるのではないのでしょうか。

(4) 受難予告の後、イエスはご自分の受難と復活の道に従うよう、弟子たちを招きます。「自分を捨てる」「自分の十字架を背負う」(24節)とはどういうことでしょうか。十字架刑に処せられる死刑囚は見せしめのために十字架の木をかついで街中を歩かされました。そこから考えると「十字架を背負う」は「苦しみや死」よりも「辱めを受ける」という意味が強いのかもかもしれません。いずれにせよ、わたしたちにとってそれは何を意味するのか、少しでもこのイエスの言葉に通じる経験を自分の中に探してみて、それを分かち合ってみてはどうでしょうか。――我が子や愛する人のために自分を捨てるということはわたしたちの身近にもあることではないのでしょうか。避けることのできない自分の苦しみを、ある時、十字架だと受け止めることができ、だからそれを耐え、乗り越えることができたというような体験もあるかもしれません。

(5) 25節で「命」という言葉は二通りの意味で使われています。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失う」では「この世の命」と「永遠の命」が対比されています。永遠の命を強調することには、時としてこの世の命を軽視する危険があるかもしれません。「自爆テロ」というのはその最たるものでしょう。「神のため」ということを理由にして、人間の命(他人の命も、自分の命も)を犠牲にしてもよいという考えにわたしたちは絶対に賛成できません。しかし今日の箇所では、この世の命を大切にしながらも、それ以上に大切にすべきものがあると教えていることも確かです。

25、26節の「永遠の命を得る・失う」というテーマとの関係で、27、28節では世の終わり(終末)についての言葉が伝えられています。イエスも初代教会のキリスト信者も世の終わりがすぐに来る(人の子が現れて世の救いが完成される)という期待を持っていたようです。わたしたちの時代はそれから2000年も経とうとしています。わたしたちにとっては「それがいつか」という時間的なことは問題になりません。むしろ、

- (a) それでもいつか最終的に神の救いが完成する、という希望を持って生きること。
- (b) 最終的な神の判断(裁き)を信じながら、今、目先の利害に振り回されず、神に対する信頼と人に対する愛を貫いて生きること。

これがわたしたちのテーマではないのでしょうか。それはまた、十字架に向かって歩むイエスご自身の歩みのテーマでもあったと言えるでしょう。